

## 二年越しの想い

香川県 玉藻中学校 2年 三井 颯剛

一昨年の夏休み、僕と母は二泊三日の東京旅行をした。二日目、絶品海鮮料理を求めて築地市場を訪れた。早朝にもかかわらず、威勢のいい声が飛び交っていた。商店の前は大勢の観光客でごった返し、通るのもひと苦労だった。築地が初めての僕は、お祭りでも始まるのかと思った。甘い香りに誘われてたどり着いた先は、玉子焼き専門店だった。熱々の玉子焼きを買い、道を挟んで向かい側の閉まっていた店の軒下で食べた。絶妙な甘さが口に広がり、玉子焼きというよりまるでスイーツのようだった。

幸せな気分で味わっていると、「ピカッ、ゴロゴロ、ザーザー」と突然ゲリラ豪雨にあった。すぐにやむだろうとそこで雨宿りをしていた。しかし、一向にやむ気配はない。僕と母は濡れる覚悟を決め、一步を踏み出した瞬間、先ほどの玉子焼き店のおばさんが、

「この傘、よかったらどうぞ。」

と言いながら、一本のビニール傘を持って駆け寄ってきた。少し錆びてはいたが、温かみのある傘を申し訳なさそうに僕が受け取ると、

「遠慮しないで使って。」

と微笑みながら言った。僕と母は店に戻り、店員さんみんなにお礼を言うと、全員笑顔で手を振ってくれた。築地の人の温もりに触れ、天気は雨でも僕の心は晴れやかになった。

帰りの新幹線でお礼の手紙を書こうとしたが、途中で眠くなり書きそびれてしまった。そして、後回しになっていくうちにどどん月日が経ってしまった。

昨年の夏休みのある夕方、僕は春日川の土手を車で通っていた。すると、突如ゲリラ豪雨に襲われた。その付近の大学の女子大生らしき二人が、ずぶ濡れになって歩いているのを発見した。そこで母が心配そうに、

「送っていこうか？」

と声をかけた。しかし二人は、

「ありがとうございます。でも、バス停まで近いから大丈夫です。」

と言って歩き出した。そこで、僕は車にあったあのときのビニール傘をあげた。豪雨でくしゃくしゃの二人の顔に思わず笑みがこぼれた。

築地でもらった傘が今でも誰かの役に立っていてほしい。僕はそれ以来、家にあるありったけのビニール傘を車に積んでいる。いつか誰かの役に立ちますようにと。

そして、今年の夏休みは家族三人で東京に行くことになった。二年ぶりの東京、僕は築地に行って、お礼をしようと提案した。満場一致で二日目の早朝に行くことになった。活気あふれる築地市場に着くと、おいしそうな魚介には目もくれず、あの玉子焼き店を訪れた。

店の人は傘のことを覚えてくれていた。香川県の名物を渡すとたいそう喜んで、できたての玉子焼きを家族三人に振る舞ってくれた。また築地で温もりを感じることができた。

二年越しになってしまったけれど、直接お礼ができ、僕の心の中のモヤモヤが吹き飛んだ。